



■子どもの疑問に「付き合って」やること

校長 栗林 昭彦



ある小学校でのお話です。6年生のAさんは本好きの女子児童。図書委員も務めています。委員会の取組で、おすすめ本のポップを作成することになり、本好きのAさんは、今回は上橋菜穂子さんの「獣の奏者」を推薦することにしました。

まずは現物をもう一度見てみようとして、図書室に行きます。人気の本ですので、ハードカバー版と、小中学生向けに編集しなおした「青い鳥文庫」版との2種類がありました。（一中にも両方あります）まじめなAさんはその両方を借り、参考にしようとしてまず見返し

（表紙の裏のところ）にある紹介文を見てみることにしました。「……天を駆ける王獣と出会い……」「……野生の王獣と出会ったあの夏以来、エリンはさらに強くその崇高な生き物に惹かれていた。」なるほど。じゃあこれを参考に、と思ったAさん、あることに気づいた。ハードカバー版では「王獣と**出会い**」なのに、青い鳥文庫は「王獣と**出会った**」となっている。これはいったいどうしたことか。Aさんは図書室の司書さんに相談してみることにしました。

相談を受けた司書さん、初めは「誤植かしら？」と思ったのだそうです。「出会う」は、人と人が出会う感じだから、人じゃない王獣とは「出会う」？でも少し自信がない。それに、Aさんにあっさり「誤植だね」というのも気が咎め、「じゃあ調べてみるね」ということになった。司書さんは市の図書館の児童書担当の職員に、「こんな質問があったのだけれど……」と伝えました。この職員さんも「確認してみる」ということで、出版元の講談社まで、電話をして聞いてみたのだそうです。運よくつながったのが、まさに「獣の奏者」の編集を担当していた人。

「こんな問い合わせがあったのだけれど……」と伝えると、「もちろん、意識して変えたのですよ！」という回答をもらいました。曰く、王獣は人間ではないけれど、読み進んでいけば、単なる獣ではないことがわかってくるはず。ここには「出会う」を使う方が自然であろうとのことから、青い鳥文庫収録の際に改めたのだ、というお話でした。

このことは職員さんから司書さん、そしてAさんにも伝えられました。Aさんはどう思ったでしょう。本を作る人たちが、そうやって一つ一つの言葉にも気を配っていることに気づいたかもしれない。自分の疑問を、たくさんの大人が誠実に対応して解決してくれたことをうれしく思ったかもしれない。もしかするとこの経験は、Aさんの今後にかしらの影響を与えるかもしれないですね。将来は、編集者や校正者、司書とかになったりするのかもしれない。そんな楽しい想像をしました。

「探究学習」の重要性については繰り返し述べています。これからの世の中、自ら課題を立てて、関連する情報を集め、評価し、活用して解決していく力が重要であり、学習指導要領もそういった方向性を示しています。生徒にはこの「探究する力」を、しっかり身に付けてほしい。今回のAさんのお話を聞いて改めて思うのは、子どもの疑問に大人が誠実に向き合い、付き合ってあげることの重要性です。子どもの疑問を「それはそういうことなんだ」と答えてしまうのは大人にとっては楽なことですが、しかしそれでは子どもたちに「探究」の力はつきません。子どもの「なぜ」に真剣に向き合い、付き合ってやること、そのうえで解答に導いてやること。そういう大人との関係の中で、「探究」することが習慣づいた人材こそ、これからの社会に求められるのであろうと思っています。

